

## 旧幕知性の水脈 —— 本木昌造・西周・洪沢栄一

樺山 紘一

### 一、旧幕知性の思考と実践

明治維新と文明開化は言うまでもなく、江戸幕府体制から近代国家の建設にいたる巨大な改革・刷新の結節点であった。この過程の分析には、きわめて複雑な図式を想定せざるをえず、無数の研究成果の出現にもかかわらず、いまなお最終的な図柄を描ききっていないように思われる。いまここで注目したいのは、維新・開化の巨大な動きのなかで、きわだった輝きをみせた一群の思想家・実務家たちの行動事跡である。

さしあたり、三人の同時代人を対象とするが、その人たちはみな何らかの意味で、旧幕府のスタッフであった。その地位と職責はさまざまだったとは言え、それぞれに幕政の一端をにやっていた。幕府崩壊に際してはその公的役割・職務を失うことになったが、その行動や思想は、のちの近代社会・文化の形成にとって重要な貢献となった。たんに古来の伝統の保守といった側面にとどまらず、むしろ維新・開化の重要な局面を支えたり、あるいはそこで失われたものの多様で積極的な保存を宣明したりするなど、きわめて重要な役割を演ずることになった。結果として、開化と維新の過程に有意の厚みと深みを与えた。それらのさまざまな遺産を適切に評価したいというのが、ここでの意図である。一見すると、失われたものへの哀惜と映るかもしれないが、じつは歴史という織物の隠された紋様を描くためにも、必要な作業であると考えている。

旧幕知性とみなされる人たちにあつて、共通の思考と実践のパターンがある。ここでは、二つの共有項を指標として、そのありかたを整理してみたい。その第一には、幕末・維新の年月のあいだに、西洋とのあいだで濃厚な接触・交流を経験したこと。言うまでもなく、ペリー来航を契機としてそのプロセスが加速されたのであるが、それ以前から開発された洋学研究の進展に始まり、やがて開国後には欧米諸国から来訪する人びととの直接の接触がつづいていた。またみずから、留学や視察・外交・商務の機会をえて、それらの国ぐにとの密接な交流を経験した。旧幕体制内にあつた有為の知性は、これを機会として多難な思考と実践にとりかかるであろう。

第二には旧幕知性の対外接触にあつても、みずからの立場の基底となる現実への執着も、軽視されうるものではない。共有されてきた伝統的な価値の保守や温存もまた避けがたい課題となつたであろう。西洋的価値との対面にあつて、堅持すべき伝統をどこに求めるか。それは、個々の人格にとつてアイデンティティの根本であり、また思考と行動を正当化する、厳粛な社会的メッセージだつたはずである。旧幕知性にあつて、それは社会輿論や同行者を説得する重要な標識ともなつたであろう。

旧幕知性たちは、こうした条件を背景として、それぞれにきわだつた特異性を発揮する場を発見した。知識人や門閥・実務家として、新体制の中核に参入しようとする者もあつた。そうでなくとも、その専門的技術や知見をもとに斬新な道程を歩むものもあつた。以下で扱うのは、そうした営為によつて近代日本に斬新な実りをあたえることになる、三人の旧幕知識人たちである。維新の騒乱を好機として、めざましい権力や財富を手中にしないまでも、近代社会に不可欠な装置や機構を準備した人びと。旧幕の体制内にとらわれつつも、時代と社会を変革・改造しようとする多様な発想や企図が登場した。対外の認識と接触や、伝統価値の保全という困難な作業をかかえながらも、考えられるかぎりの多様なかたちをとつて、巨大な革新力を湧き出させることになつたのである。

## 二、本木昌造 ——長崎通詞から印刷・造船の起業へ

幕末の長崎奉行所の阿蘭陀（オランダ）通詞である本木昌造は、もとは馬田家もしくは北島家の出身である。才覚をみこまれて養子として本木家に入り、専任の通詞として勤務するのは一八四四年のことである。通詞は日常的な接触をおして西洋の文物や人物を広く見聞し、体験したであろう。一八五三年、ペリー艦隊の来航は、長崎を経由せずに、直接、三浦半島の浦賀にむかったため、通詞としての出番はなかった。しかし、開国要求国書への返答を求めた翌五十四年の第二回来航にあつては、事前にこれを察知した幕府は、本木を抜擢して長崎から召喚する。通詞は開国交渉の表裏にわたって、直接の任務にあたることになる。

さらに重要なことに、ペリー艦隊について開国要求のために来航したロシア帝国のプチャーチン艦隊については、本木は直接の応対と役務を託される。ペリー艦隊とのあいだでの実務的な接触にもまして、プチャーチンとのあいだでは、オランダ語・ロシア語を介した実りある対話が実現することになった。一八五四年十月、交渉待機中のロシア艦隊を安政伊豆地震が襲い、プチャーチン艦隊のディアナ号は津波によって大破。航行不能におちいる。廃船におこまれたディアナ号の代船として、西伊豆の戸田港において新船の建造にとりかかることになった。このとき、本木は幕府側の責任者である勘定奉行・川路聖謨に替わって、全期間三カ月をおして、通訳と接遇を担当した。

戸田村の居所において、本木とプチャーチンはきわめて濃厚な交流を共有し、船舶建造の技術をはじめとして、膨大な西洋情報を学びとることになった。ヨーロッパ社会の貴族身分にあるプチャーチンは、新生のアメリカ海軍司令官ペリーとはちがって、広汎な知識と教養にあふれていた。本木にとつて、この三か月の待機は、ヨーロッパ近代を学習するまたとない機会となった。ロシアの要人たちは新造のヘダ号で帰国し、やがて幕府と諸国とのあいだの交渉の地は、長崎から下田・横浜へ移った。長崎の通詞の枢要な役割は減じていった。けれども、本木が受けとった鮮烈な体験や知識は、旧幕知性として

予想外の価値をもつことになる。

本木にあつては、プチャーチン体験ばかりか、長崎において獲得した知識や情報が、さらに広汎な分野に及んでいたようである。出島のオランダ商館だけでなく、長崎市街では外国由来の多様な文化や情報が蓄積されていた。シーボルトが伝達した医学・博物学知識はもとよりのこと、長崎に蛸集した清朝中国人がもたらした東洋文化も重層されていた。中国に向けて開かれた長崎という扉は、中国語通訳の唐通辞から唐館屋敷に居住する商人、黄檗宗僧職者まで、裾野の拡がりを受けている。長崎土着の本木にとっては、これらはほとんど土地の伝統的価値として活力をたもっていたはずである。長崎の街は、鎖国時代にあつても、西洋とのあいだの通絡路をひらいただけでなく、東洋（中国）文化をも土着させて、日本という伝統価値を大幅に肥育する媒介役をはたしたのであろう。

さて、オランダ通詞として幕府職務の末端にあつた本木は、明治新政府の成立とともに失職するが、そこで習い覚えてきた業務知識をもとにして、めざましい起業にふるいたつた。プチャーチンから受け取った船舶などの機械技術は、長崎における洋風造船業務の樹立につながる。また、それとも関わりのある大型の金属材料技術は、港湾や架橋といった土木事業の新興に結びつく。のちに長崎造船所にまで展開するなど、港湾産業のリーダーとして成長してゆくであろう。

本木にとってより重要性が高い技術革新は、じつは合金技術を仲介とする活字製造であつた。中国（マカオ）を仲立ちとして展開した印刷術の核心は、合金術にもとづく活字製造であつた。導入された金属活字製造法は、通詞として親しんできた書籍出版につながる。伝統的な木版整版法にもとづく印刷出版事業に、活字活版法を適用しようという試みは、幕末の各地で挑戦されていた。本木は、金属加工として、活字製造に電鑄（電胎）法を導入して、従来の印刷工程を根底から変革することに成功した。その決定的転換点は、アメリカ人宣教師ガンブルとその事業所・美華書館による教示であつたが、これにせよ通詞から事業への転進にあつて特段の構想力がもたらしたものである。「近代日本印刷術の創出者」は、こうして一介の旧幕知性から生まれたのである。

### 三、西周 —— 藩儒から新時代の啓蒙思想家へ

西周（一八二九—一九七）は、石見の小藩・津和野の藩医の家に生まれ、儒者でもあった。医官として勤務する西周にとって、十四歳の年に起きたペリー艦隊の来航は、決定的な屈曲点となった。儒者としての将来を捨てて脱藩。大坂で洋学研鑽にすすむ。ここで目覚ましい成長をとげた西周は江戸に向かい、幕府の蛮書調所に所属し、若手メンバーとしての役務を託されることになる。蘭学から英学へと転換する幕末洋学の中核に参画する。

一八六三年、幕府は本格的な専門留學生の派遣にふみきる。薩摩・長州などの雄藩が、それぞれひそかに派遣をすすめるなか、幕府は十名の正式の国費留學生をオランダに送りだした。西周はその一員として選抜され、榎本武揚、津田真道などのちに明治の日本を牽引するはずの知識人・官僚たちとともに旅立った。オランダ・ライデン大学において、三年間の研修をおえて帰国。ライデンで学びとった十九世紀中葉ヨーロッパの哲学・社会科学の最前線を、直接に外国語から日本語に翻訳し、日本近代学術の基礎をきずきあげた。かねてのように、出版物の翻訳の読解によってではなく、文字どおり肉声をとおして西洋学術の粋を学びとった結果である。「哲学」「帰納」「演繹」をはじめとする学術用の訳語は、のちにそこから編み出された。『百一新論』や「百学連環」などの著作や講義は、西洋起源の学術を日本に根付かせるために標準を提供した。旧幕知性が幕末と明治初年にあって残した、偉大な遺産というべきであろう。

くわえて西周の思考テキストには、儒者の伝統を受けて、きわめて多くの日本固有の思考の足跡が残されている。このこと、重要な注意をむける必要がある。西洋哲学理解へのリファレンスとして頻繁に引用されるのは、じつは日本や中国の思想用語、とりわけ近世儒教としての宋儒と荻生徂徠のそれである。西周はこれらを批評・評価するとともに、ヨーロッパ思潮との交錯に、綿密な配慮をおこなう。その精度には疑問の余地があるとはいえ、つねに払われる比較思想的配慮は、その種のものとしてはもつとも早期の試みである。西周にとっては、アジアの諸思想との対比のなかでこそ、西洋思想に独特

の価値が付与されていたようにみえる。

西周は帰国後、維新にあつては旧幕の高等教育の継承をめざして沼津兵学校を設立・主宰したのち、新政府の制度創設にあつて、重要な地位を占めることになる。明治六年の明六社設立にあつては、その中核メンバーとなり、さらには憲法發布にまでいたる明治国家体制の守護役として働いた。明治の啓蒙思想家として、社会的合理性の実現に十全の貢献をなしたことがことになる。それは、西欧で学びとつた近代社会原理の粋を、日本の現実のうちに移植する長大な営みであつた。旧幕知性の揺るぎない道程といつてもよからう。

#### 四、渋沢栄一 —— 慶喜側近から明治実業家への飛躍

渋沢栄一（一八四〇—一九三二）は、旧幕知性として、最後の世代に属する。あるいは、「旧幕」と呼ぶことに抵抗も受けるであろうか。しかし、たしかに渋沢は退場する徳川慶喜將軍の最後の側近として、西周とともに静岡に待避した旧幕府要人のひとりであつた。しかもものちにも、隠居後の旧將軍を一九一三年の最期まで見守り、葬儀委員長を務めた。文字どおりの旧幕人であつて、名著『徳川慶喜公伝』は、渋沢がその全体にわたつて配慮をいきわたらせた渾身の作である。

よく知られるとおり、渋沢は新政府からの招聘に應じて、明治の初年には「大蔵省」の組織整備にかかわり、新国家の建設に献身した。しかし、明治六年というごく初発にあつて、官界の大勢と見解を異にして退官の道をとつた。そののち半世紀にもわたつて、仕官の道を拒絶し、在野の事業家として新生の日本経済社会の育成に尽力しつづけた。生涯をとおして設立・運営にたずさわつた実業体は、じつに五〇〇を数える。また、福祉・教育など各種の公益事業もほぼ同じ数にのぼるとされ、近代日本社会の基盤形成に貢献した。その構想力と行動力とは、ほかに例をみない。「日本近代経済の父」と評されるところである。このことは、いまこれ以上の詳論に及ばないであろう。

しかし洪沢の活動のありかたを見ると、それを可能にした独特のモチベーションに注目することもできる。そのひとつは、洪沢の社会事業の初発にあつて顕著に機能した在外体験である。洪沢は偶然のいきさつから、幕末の一八六七年、パリ万国博覧会に、幕府の使節として派遣された徳川昭武の随員として、フランスに滞在。將軍慶喜の末弟である昭武は、洪沢を実務上の側近とみなし、財務や総務の大半をゆだねた。洪沢はまったくの初体験ながら、みごとに実務能力を発揮し、フランス経済の慣習に習熟するにいたつた。おりから成熟にむかうヨーロッパの経済社会に身を託し、産業資本主義の仕組みを理解するにいたる。この経験は近代日本において空前絶後であり、滞在時のみならず帰国後の日本にあつても、驚くべき成果に結びつくことになった。当時のフランスを席捲していたサン・シモン主義や産業資本主義の奥義が、実際の場において習得された。「合本主義」などのちの洪沢独自の主張は、ここに立脚した。こうして、経済思潮における異文化接触は、洪沢にあつてはほとんど予想外の速さで進行したのであつた。

いまひとつ、洪沢の社会行動として特筆される一面をとりあげておこう。当人が述懐するところによれば、洪沢は若年の頃より、『論語』のテキストをつねに懐中にし、そのの章句を導きとしてきたという。七十七歳にしてすべての公職を引退するにあつて、洪沢は『論語と算盤』を刊行して、その経緯を公にした。いまでは洪沢の真髓を語るものとして、広く講読されている。そのことの意義は、どのように理解されるであろうか。

たしかに『論語』という古典テキストは、すくなくとも江戸時代の中期までは、閉じられた身分社会の内部、閉鎖的なサークル内で読まれてきた。しかし、江戸後期ともなると、儒教一般へのアクセスが容易となり、『論語』への親和感が急速に向上してきた。整版テキストの広い普及があらわとなり、儒学は階級・身分・職業上の占有事項ではなくなった。洪沢もその少年時代を送つた幕末に、その故郷・武州血洗島にあつて、義兄の尾高惇忠からそれら古典の手ほどきをうけていた。尾高は、まさしく農民世界の各地で見られるようなオピニオンリーダーであつた。漢学、儒学、文学などのリテラシーが急伸し、士分ばかりか市井、民間のご意見番がテキストを自由に読解しはじめたのである。『論語』は、一方では宋

儒以来の形而上学や、社会階層論の骨格となる名分論イデオロギーとして講じられたが、他方では開明的な読解・解釈をも許容するようになっていた。いわば「論語の時代」が、幕末から維新の時代の日本にやってきたといってもよい。

『論語』は公教育から読書訓話などの広いフィールドで、国民的教養の基体のひとつとなる。たしかに、明治時代には一面では洋学伸長と漢学衰微というネガティブな現象がみられてはいた。とはいえ、これと競うかのように、湯島聖堂から三島中洲にいたる広いウイングのなかで、儒教や『論語』という市井・民間における常識領域も、確実に定着をみるようになっていく。渋沢にとって『論語』は、時代に向き合うときに座標軸を提供する公認の伝統価値に思えたであろう。『論語』は、ここでは古くてかつ新しいシンボルであった。渋沢は、こうして西洋での実務体験を基底とし、また東洋アジアの常識としての『論語』と儒教とを、常識的価値観の導きに位置づけた。その精神的な基盤の上に立って、日本における近代経済の事業構築を志向することになったのである。

## 五、渋沢栄一と福沢諭吉のあいだ

旧幕知性としての渋沢栄一を論じたのだが、最後にこれときわどい対比関係にある、いまひとりの知性について触れておきたい。さまざまな側面から渋沢との比較の対象とされる人物、つまり福沢諭吉である。

福沢諭吉（一八三五—一九〇二）は、渋沢の五歳年上。ともに維新・開化の激動と明治年間の転変を、ほぼ同一の環境のなかで生きぬき、日本近代社会の推進力、もしくは指導者として活動した。ふたりは、おなじく幕末の遣外使節の一員として、外国体験をつんだ。福沢は短期間のうちに、アメリカ合衆国をふくめてじつに三度の海外視察団に加わった。旺盛な探検心からは、『西洋事情』などの著作が生まれた。はじめ蘭学からとりついた外国研究は、やがて英学に転じ、おりから隆盛にむかうイギリス流の世界認識の方式を身につける。その足どりは、フランスでの実務体験から学んだ渋沢栄一と類比



し、また微妙な違いをも映し出すことになる。

九州・中津藩の出身であっても、旧幕家臣という体験をもたぬ福沢は、当初から洋学系統のトレーニングを受け、儒教教養や伝統知識体系には、ほとんどシンパシーを抱かない。渋沢とは、おのずから異なった思考風土を呼吸することになった。しかし、明治初年の政治権力の構築を見聞した福沢は、その見識に注目する新政府からの出仕要請に、断固として拒絶の態度をつづける。明治六年に結成された、啓蒙主義の論客による明六社にあっても、福沢は突出した非政府論客として、立場を守りぬいた。明治五年に、明治政府の高官の地位を放擲した渋沢と、まったく共通の行動をとったことになる。

両者は確実に同道を歩んでいた。一方には、啓蒙主義思想家として、また慶応義塾の総帥として言論の立場をつらぬく福沢。他方には、経済という実業にあつて、産業と公益の実現に献身する渋沢。現実の世界における対照的な行動様式は、両者を大きく二分するとしても、維新・開化をくぐりぬけたのちの二人は、根底においては通絡していたともいえよう。

しかし実際のところ、明治日本に濃厚な影をうつす福沢と渋沢とは、きわめて昵懇の間柄とはいえない。相互には敬意を交換していたとしても、ともに盟友として認めあつていたわけではないようである。啓蒙の思想家と民間の実業家とのあいだには、共有すべき理想が成り立ちにくかったというべきであろうか。さらには、政治・社会的合理性の貫徹と、現場の実利・実業の追求ということとなった関心が、ついには密接な交流・協働を許さなかったのかもしれない。いずれにしても、両巨人のあいだの関係如何は、維新・開化の近代日本の形成における大きな流れのなかで論ずべき設問である。

ちなみにこの両者のあいだでは、二〇二四年に日本の最高額紙幣の肖像として、交替が予定されている。福沢から渋沢への移行は、たんに一万円札のデザイン上の変更にとどまるものかどうか、いささかの好奇心をも誘う主題である。

なお、本稿は、二〇二二年五月八日に二松学舎大学において開催された東アジア文化交渉学会第十三回年次大会・二松学舎大学東アジア学術総合研究所国際学術シンポジウムにおいて行われた講演のテクストに語句等の訂正を加えたものである。